



## ChatGPT

息子に勧められ ChatGPT を使い始めた頃、国際誌への投稿を考えていた論文の英訳が業者から届いた。読んでみると完成度が高いと思う一方で「難し過ぎないかな」と少し残念な気分になった。この英訳を ChatGPT に読ませて和訳させてみたらどうなるだろうか。専門的な学術論文の英訳がどこまでオリジナル和文を再現できるのか——翻訳機能を見極めるのにはちょうどいいタスクである。英文ファイルを放り込んで「この論文を和訳して下さい」とコマンドする。スラスラとイントロダクション部分の和文が提示される。そこに見たものは、私の書いたオリジナル和文とほとんど同一のものだった。これには恐れ入った。「この感じでいいですか、そのまま続けましょうか」と聞いてくる。「続けて下さい」と指示すると、また次のパラグラフが訳出される。私は「この英文は実は私のオリジナル和文を翻訳業者に翻訳してもらったのだが、この英訳はどう思うか」と尋ねてみた。すると「この翻訳は非常に精度が高く完成度も高い」と評価してきた。そうなのかと思いつつ、私の率直な感想をぶつけてみた。すると「この翻訳は原文の格調の高さを反映しているもので、その点で難しく感じるかもしれません。もう少し読みやすくなりますのでやってみましょうか」と言ってくる。「そんなことできるの?」と思いつつ「見たいのでやってみて下さい」と応ずると、これまで訳出してもらった部分の新たな英訳がサッと提示される——確かにずっと読みやすい英語になっている、しかも内容も逸脱していない。

驚いたのは、その翻訳機能だけではなかった。「この論文を国際誌に投稿しようと思うがどうか。国際誌に投稿する価値があるかどうか、率直に評価して下さい」と尋ねてみた。すると、この論文の要旨、強み、弱み、改善すべき点などがスラスラと提示される。一つ一つの指摘がもっともなのである。結論としては「この論文は価値が高いのでぜひ投稿してください」という。そう言われるとちよっとい気分になって思わず「そう評価してもらえると嬉しい」と思わず応えてしまう（人間と対話しているような気持ちになる）。今度は尋ねてもいないのに、論文の投稿先の候補が複数示され、それぞれのジャーナルの特徴までが記され

ている。なぜこの論文がそのジャーナルに相応しいのかまで解説されている。国際誌に疎い私には知らない雑誌ばかりだが、最初の候補だけは心当たりの名前があった。「ちゃんと ChatGPT は考えている」。ひととおり英文を直してもらおうと、そこでも作業は終わらない。「academic polishing をしましょうか」と提案してくる。「なんだ、それ?」である。その分野でより洗練された専門的なものに発展させる（磨き上げる）作業のことをいうらしい。お願いしてみると、オリジナルの文脈がより洗練されたものになっている。ただ注意深く読んでみると、自分がこだわっていた論旨が微妙にずれている部分がある。そこは自分の意図をはっきりと伝えてみる。するとその意を汲んで文章を修正してくれる。投稿しようと思っていたジャーナルの投稿規定も調べ上げていて、それに適合しているかどうかもチェックしてくれている。さて実際に投稿の段になっても ChatGPT は役に立つ。国際誌への投稿は長いブランクがあって、投稿作業自体をすっかり忘れてしまっている。細かい手順でもそこで引っかかってしまうと先に進めない。論文のキーワードがうまく入力できず、そこで作業が止まってしまった。「困ったな。諦めるわけにもいかないし、誰に聞いたらいいんだろう」。そこで正直に ChatGPT にこの情けない状況を説明すると「キーワードを入れたら、その隣にある+のボタンをクリックして下さい。そうすれば入力できます」という。なんのことはない、「それだけのこと」なのである。ただそれができなければ、先に進めなかったのもまた事実であり助けられた。

よく言われていることだが、そのまま信用できないこともある。英文論文を翻訳してもらっていたときのことである。突然登場した「遺伝的理解」という言葉に首を捻った。その原語は genetic understanding だった。これはもちろん「発生的了解」と訳さなければならないところなのだが、こんな間違いもすることがある。おそらくこの誤訳は、ChatGPT の思考が確率論に基づいていることを反映したものだだろう。医学系論文で genetic と出てくれば、それは「遺伝的」と訳される可能性が圧倒的に高いはずである。

しばらく使ってみて気がつくことは、次々と提案してくることである。Chat だから、こちらが「終わりにします」と言わない限り、いつまでも続くのが ChatGPT の性質の



ようである。延々と続く ChatGPT の提案には、耳を傾けるべきものと、そうでないものがある。提案通りに進めていくと、本題から外れてしまうことがある。Chat は楽しくて面白いのだが、論文作成の際には提案は改善につながらない場合もあることを肝に銘じている。提案を受け入れるかどうかの判断は自分自身で下さなければならない。どこまで AI に頼って論文を作成してもいいのか、これも丁寧に教えてくれる。要は自分自身が常に主体的にかかわっているということだと ChatGPT はいう（翻訳やその推敲は問題ない）。

翻訳でもう一つ期待していることがある。これまで精神病理学の分野で重要と思われる文献をコツコツ集めてきた。ドイツ語の古書はもっているだけでほとんど読んでいない。Bumke, S. の編集した 11 冊のハンドブック（1920 年代）、その続編である Gruhle, H.W. らの編集した 5 冊のシリーズ（1960 年代）、Schneider, K. や Kretschmer, E. の重要文献もある。ChatGPT にこれらの古典の翻訳を頼んでみたい。試しにちょっとだけやってみると、100 年以上前のドイツ語原文が読みやすい日本語になって目の前に展開した。これはなんとも感慨深い。一連の作業で ChatGPT と付き合うコツが少しわかってきた。それは徹底的に尋ねることである。くどいくらい尋ねると良い。そして、提案されたことを選択するかどうかは自分で決めるということである。Birnbaum, K. の構造分析、Kretschmer の敏感関

係妄想、Schneider の臨床精神病理学、Kahlbaum, K. の緊張病、そして Jaspers, K. の一般精神病理学など原書を読み解き、自分が納得のいく日本語訳をつくりたい。

AI を介した卓越した翻訳機能は、単にドイツ語やフランス語の古典文献に私たちを近づけるだけではない。その逆のことも考えられる。日本語で書かれた精神病理学の文献に、世界中の研究者が直接アクセスできるようになる可能性である。1980 年代頃までの日本の精神病理学は、世界的にも高い水準にあった。その時代に積み上げられた多くの知見は、言語の壁のために国際的には十分に共有されてこなかった。しかし AI 翻訳の時代には、それらが再発見される契機が訪れている。たとえ完璧ではなくても、日本語の文献を手がかりに海外の研究者が議論を始めることができるようになる。そのとき初めて、日本の精神病理学は新たな意味で「世界の精神医学」に参入するのかもしれない。かつて外国の学説を取り込み、自国の文化や臨床経験と照らし合わせて独自の展開を行った日本の精神病理学は、今度は AI という翻訳の橋を渡って、世界に語りかけることになるかもしれない。

AI との対話は単なる効率化の道具にとどまらない。そこには歴史的に埋もれてきた知の資源を解放し、新しい国際的対話を可能にする潜在力がある。その可能性をどう活かすかは、私たち一人ひとりの姿勢にかかっている。

古茶大樹